

大串明弘作 「結婚」

- ナレーション 永遠の昔から、この世には男と女がいる。男は女を好きになり、女も男を好きになり、その気持ちは、まるで雪山のなだれのように、ひとたび芽生えるとどまるところを知らない。このマカ不思議な男女の関係を、人は「恋愛」と呼ぶ。そして、この熱き2人が行き着く“地上の楽園”、それが「結婚」である。ところが――。
- 健二 うえ！ なんだよ、これ？ 真っ黒こげじゃん。お前、結婚して1か月にもなるつてのに、餃子^{ぎょうざ}もろくに焼けないのか？
- 幸子 そんなこと、人がいるときに言わなかったっていいでしょう？
- 健二 人がいるとかいないとか、そんな問題じゃないだろう！ 大体なんで素直に謝れないんだよ、お前は！
- 淳 まあまあいいじゃないの、餃子^{ぎょうざ}ぐらいで。うちのなんて、結婚した時は料理なんて卵焼きぐらいしかできなかったよ。
- 幸子 あんただって、服はあっちこちに脱ぐし、新聞だって見たらその辺にほうり投げとくし、だれがいつも片付けてると思ってんだよ。
- 健二 なんだ、その言葉遣いは！ ったく、付き合ってるときはカワイ子ぶりやがってよ。こんな言葉遣い悪いやつだなんて、これっぽっちも分からなかったよ。全く、だまされた気分だぜ。
- 幸子 うるせえなあ！ そんなら出てけよ！
- (効果音) (ガシャーン。皿を投げる音。)
- 淳 ちょ、ちょっと、そ、そんなに怒らなくても…。
- 健二 てめえ、物に当たんなっていつも言ってるだろ！
- (効果音) (バシ！ 健二の平手打ちの音)
- 淳 健二、やめろよ。
- 幸子 (泣きながら)もうイヤだ！ こんな生活！
- 健二 さ、幸子…。
- (効果音) (バタン。ドアが閉まる音。遠ざかる足音。)
- 淳 いいのか？
- 健二 あーあ。なんでこうなるんだよ。結婚する前は、何があつたってケンカになんてななかつたのに…。今まで黙ってたけど…新婚旅行から帰ってきてしばらくしてから、毎日こんな調子なんだぜ。おれたち、まだ22だろう？ 早すぎたのかなあ、結婚したの。
- 淳 そんなことないよ。うちなんて^{はたち}20歳の時だよ。
- 健二 そうだよなあ。…お前んとこは仲良くやってんもんなあ。

(効果音) (幸子、泣きながら道路を歩いている。車など、街の雑踏。)

幸子モノローグの どうしていつもこうなのよ。わたしたち、好きで結婚したんでしょ？ 健二と一緒にいられさえすればって、あんなに思ってたのに…。どうして？ もうダメなの、わたしたち？ (泣く)

(効果音) (玄関のチャイム)

恵美 は一い、どちら様ですか？

(効果音) (ガチャッと玄関を開ける。)

恵美 幸子？ どうしたの？ うちの淳が行ってたんじゃなかったっけ？ …幸子、泣いてんの？

幸子 恵美… (わっと泣き出す)

恵美 どうしたの？ 何があったの？

(音楽) (ブリッジ)

健二 おれたちさ、結婚する前はすっげー仲良かったんだぜ。あいつのこと、すごく好きだったし、愛してた。だから結婚したんだ。でも結婚してちょっとたつと、あいつ、超ムカつくことばかりするんだよ。料理が不得意だとか言って、あんまり作ってくれなくなったしよ。結婚する前はドライブなんか行くと、必ずお弁当とか作ってきてくれて。…あいつのそんな家庭的なところがすごく好きだったんだ。それなのに、最近は外食ばっか。それによ、あいつすっげー怒りっぽいなだよ。結婚する前は、おれの前で怒ったことなんてなかったのに、ちょっとしたことで怒るんだよな。それに、お前も見たろ、あの態度？ 普段はそうでもないけど、怒り出すと、女のくせに男みたいな言葉遣いするんだ。おれ、女が男みたいな口きくのって許せないんだよ。だからおれもカッとキっちゃうだろ。そうすると、ああやって物に当たり始める。ひどいときなんておれに殴りかかってくるんだから。全く、やんなっちゃうよなあ。

(音楽) (ブリッジ)

幸子 健二ったらひどいの。前はあんなに優しい人だったのに。最近は怒ってばかり。それに、わたし、料理が下手でしょう？ 彼が疲れて会社から帰ってきてんのに、わたしが作ったまずい料理なんて食べさせられないじゃない？ だからといって、わたしの得意な料理だけ毎日同じものってわけにはいかないし。…それに結婚する前は、2人で外で食事するのが楽しくて、彼もすごくうれしそうだった。だから“その方がいいだろう”と思って、外食に行くんだけど、彼ったら、食事の間、ブスとして、何にも話してくれないんだよ。そのあと家に帰ってきても、独りでお酒飲んで寝ちゃうし。それに前は家事とかにも協力的だったのに、今では自分の脱いだものも片付けないし。新聞とかもその辺に広げて、そのまんまにしておくし。そんなだらしない彼を見ていると、ついカッとなっちゃって、怒っちゃうのよね。それに、彼って食べるときに口をちゃんと閉じないで食べるでしょ？

クチャクチャクチャ口の中のものが見えて、こぼれちゃいそう。わたし、そういうのイヤで、前はそんなに気にならなかったのに、最近すごく気に障るのよね。前はこんなに怒りやすくなかったんだけど、きっとストレスがたまってるのよ。実はね、そのうち彼を驚かせようと思って、彼に内緒で昼間お料理学校に行ってるの。わたしは彼のために一生懸命頑張ってるのに、彼ったら冷たいでしょ？ だから余計イライラしてくるのよ。。ねえ恵美、わたしたち、どうしたらいいの？ 彼、わたしのこと嫌いになっちゃったのかな？ わたしたち、もうダメなのかな…(泣く)

恵美 そんなことないよ。きっとお互いに相手の気持ちがよく分かっていないだけよ。あなたたち、最近いろんなこと話してる？

幸子 ううん。だって彼っていつも不機嫌で怖いんだもん。近寄ったらまたどなられそうで。

恵美 そっか。じゃあ、彼がなんで外食がイヤなのかとかかって聞いてないのね。

幸子 うん。

恵美 じゃあ、彼に「ちょっと家事を手伝って」って言ったことはある？

幸子 そんなこと言えないよ。「疲れて帰ったのに冗談じゃねえ」って怒られちゃう。

恵美 でも、彼ってそうなる前はずっと優しくだったんでしょ？ 何でそんな彼が急に冷たくなったか考えたことある？

幸子 それは、もともと彼が冷たい人だったのよ。結婚するまでは上辺だけの優しさだったのよ、きっと。

恵美 幸子、それはあなたの思い過ごしかもしれないでしょ。彼のことほんとに愛してるんだったら、そんな風に言うんじゃないの。

幸子 じゃあ、どうしたらいいのよ。もうわたし、こんな生活はイヤ。結婚って、もっと毎日が楽しいもんだと思ってた。それなのに…。

(音楽) (ブリッジ)

健二 なあ、淳。おれたち、一体どうしたらいいんだろう。何もかもうまくいなくてよ。あいつ、もっとかわいいやつだと思ったのに、最近はおれに逆らってばかりいるし。あいつがもっと素直になっておれの言うことを聞いてくれたら、きっとうまくいくと思うんだけど。

淳 でもさ、健二。話聞いてると何かおかしいんだよな。だって、幸ちゃんってそんな人じゃないと思うんだ。パーベキューとかやったって、いろいろ気がつくし、よく手伝ってくれるじゃん。お前たち、ちゃんと話し合ってる？

健二 冗談じゃないぜ。何でこんな状態で話し合いなんてできんだよ。こっちが何か言ったって、あいつがすぐ怒るしよ。最近はおれを利きたくもねえよ。

淳 おいおい、それじゃ何も解決しないじゃん。そんなことしてたら、幸ちゃんだっていい加減やんなっちゃうぜ。

健二 …。おれちょっと、外見てくる。
(効果音) (ピンポン。玄関のベルの音)
健二 幸子？
恵美 こんばんは。
健二 なんだ、恵美さんか。
恵美 「なんだ」とはごあいさつね。あなたの大事な奥様を連れてきてあげたのに。
健二 さ、幸子…。
恵美 さ、入ろ。お邪魔します。
淳 あれ、どうしたの恵美？ 忙しいんじゃないの？ あ、幸ちゃん！
恵美 幸子、うちに来てたの。
淳 そっか。でもよかった。心配してたんだよ。健二なんか、今幸ちゃん探しに行くとこだったんだから。
幸子 え、健二が？ わたしのこと探しに？
健二 ああ。何となく心配になってな。
幸子 健二。…
健二 でもよ、もうあんな態度すんなよな！ お前のせいでいつもケンカになるんだから。
淳 おい、何でそんなこと言うんだよ。
幸子 どうして、そうやっていつもわたしのせいにするわけ？ せっかく仲直りできると思ったのに。大体、ケンカの原因をつくるのはいつも健二だろう？ 何でわたしのせいにすんだよ！
健二 何でおれが原因なんだよ！ ふざけんなよ！
幸子 いい加減にしてよ！ もうイヤ、イヤイヤ！ こんなことばかり。わたしたち、もう別れようよ！(効果音 多重エコー)
ナレーション この2人、ひょっとして今のあなただろうか？
(音楽) (荒々しい、不安そうな感じ)

<後編>

ナレーション 昔から、男は女を愛し、女も男を愛し、そして結婚する。なぜ彼らはお互いに引かれ合うのか？ 聖書には、こんなことが書いてある。「男が眠っているうちに、神様が1本のあばら骨を取り出し、それで女をつくった。それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、二人は一体となるのである。」と。だが—
幸子 いい加減にしてよ！ もうイヤ、イヤイヤ！ こんなことばかり。わたしたち、もう別れようよ！(効果音 多重エコー)
健二 え？ わ、別れるって、離婚するってことかよ。
幸子 そうだよ。いつまでもこんなこと繰り返したってしょうがないじゃない。

恵美 健二君、1つ聞いていいかな。

健二 …

恵美 今でも、幸子のこと愛してる？ 結婚した時のように。

健二 …ああ、愛してると思う…けど。あんまし自信ねえよ、今。

恵美 じゃあ、幸子は？

幸子 わたしは最近よく健二とケンカするようになって、考える。ほんとにわたしは健二を愛しているのか、健二はわたしを愛してくれているのかって。正直言って今はよく分からない。どっかで歯車が違っちゃったみたい。

恵美 わたしね、昔付き合っていた人がいたんだ。お互いに本当に愛し合っていると思ってた。将来結婚しようって約束もしてた。ところがね、ある日突然、彼が別れたって言ってきたの。わたし、何がなんだが分からなくなって。…気がついたら病院のベッドに寝てた。後で人に聞いて分かったんだけど、その帰り道にフラフラと車道に出て行って、車に跳ねられちゃったの。気がついてから何日間は何も食べられないで、ずっと泣いてた。体中がすごく痛かったのもあったけど、それよりも心の痛みのほうが大きかった。両親が心配して彼を呼んでくれて、彼も来てはくれたんだけど、目が違うのよね。もう以前のあの彼じゃなかったの。わたしはその時分かった。今までののは本当の愛じゃなかったんだって。

幸子 ふうん。それで、本当の愛ってなんだか分かったの？

恵美 うん。入院中のあることがきっかけでね。

健二 あることって？

恵美 わたしね、それからしばらくは何にもする気力がなくなっちゃって、自分がセミの抜け殻みたいなのは分かるんだけど、そんな自分に同情することさえもできなかった。リハビリもしなくちゃいけなかったんだけど、ただベッドの上でどこを見てもなくボーっと毎日を過ごしてた。そんなある日、隣のベッドにいるおばあちゃんのところに、なんだかとっても優しい男の人が訪ねてきた。あとで分かったんだけど、キリスト教の牧師さんだった。

(回想)

牧師 おばあちゃん、こんにちは。

老婦人 なんだ、またあんたかい。今日は何しに来た？ お布施が欲しいんなら、よそへお行き。

恵美 そのおばあちゃんは資産家だったんだけど、それまで何度も人にだまされて、やっといい人に巡り会えたと思って結婚したら、その人にも裏切られて、全財産を取られちゃったらしいの。わたしは耳に入ってくる2人の会話を何気なしに聞いていた。

牧師 (笑う)お布施ですか。そんな、とんでもない。今日はね、おばあちゃんにお友達を紹介しに来たんですよ。

老婦人 え、友達？
牧師 ええ。
老婦人 どうせ、ろくなやつじゃないんだろ？
牧師 いや、今までおばあちゃんのことをずーっと愛している方ですよ。
老婦人 ふん、そんなやつ、いるもんかい。
牧師 ところがあるんですよ。その方はいつもおばあちゃんのことを愛していて、自分のほうに振り向いてもらいたい、自分に気づいてほしいと思って、いろんなことをしてきたんですよ。でも、おばあちゃんはそのことに気づかず、ずーっと今まで生きてきた。それでもその方は、愛することをやめたことがなかったんです。

老婦人 あたしがだれかに片思いされてたって言うのかい？
牧師 (笑い) まあ聞いてください。その方は、おばあちゃんが今までどんなにひどい目に遭ってきたか、傷ついてきたか、そして今、だれも信じられず、だれも近寄ってくれず、どんなに独りぼっちで寂しい思いをしているかも、すべてご存じなんですよ。

老婦人 (涙ぐむ)
牧師 その方はね、人に求めることをせず、与えることしかしませんでした。そして、おばあちゃんが、自分が犯した罪のために地獄に行ってはかわいそうだと思います、その罪の身代わりとして、自分の一人子を死なせたんです。おばあちゃん、こんなにあなたのことを愛してくれる方がいるなんて知ってましたか？

老婦人 (涙ぐむ) …それはどなたですか？
牧師 聖書の神様です。そしてあなたのために死なれたのは、その神様の一人子、イエス・キリストです。

老婦人 (ワーワー泣き出す)
恵美 おばあちゃんは、声をあげてわんわん泣いてた。わたしも泣いてた。その時分かったの、本当の愛とはどういうものか。

幸子 ふうん、そんなことがあったんだ。そう言えば、恵美たちクリスチャンだよ。2人を見ていると、わたしたちとはどっか違うなって、いつも思うんだけど、2人が結婚したのも、今の話と何か関係あり？

淳 ああ。その牧師さんってのは、おれたちが今通っている教会の牧師さんなんだ。恵美がね、退院してから教会を訪ねてきて、知り合ったわけ。

恵美 始めはもちろん、この人と結婚するなんて夢にも思わなかった。でも、この人、別れた彼とも、ほかのどの男の人とも違ってた。何て言うか、一緒にいてすごく心が楽なのよ。ズタズタになったわたしを、黙って、そのまんまで受け入れてくれた。温かいものでわたしを包んでくれたの。

健二 なんか、分かるよ、言ってること。おれにはそれがないんだよな。
淳 いやあ、おれだって、本当はものすごく自己中心で、冷たい男なんだ。神様信じ

て、少しずつ変えられていったんだよな。聖書にこんな言葉があるんだよ。おれたちの結婚式でも、牧師さんが読んでくれた。「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてを我慢し、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。」

健二 うーん。すげえカッコいいけど、なんか抽象的で、イマイチ分かんねえな。おれたち2人の場合、具体的にどういうふうにあいさすすればいいんだよ。

恵美 そうね。まず、相手から求めることをやめて、お互いに与えることだけを考えてらどうかしら？「愛は自分の利益を求めない」ってあったでしょ？

健二 与える愛か…。なるほどね。そう言えば、結婚する前は、与えられることもうれしかったけど、でも与えることのほうがもっとうれしかったような気がする。それで相手が喜んでくれて、その相手の喜びが、何よりの自分の喜びだった。それなのに今のおれは、それを忘れて求めてばかりいる。

幸子 それを言うなら、わたしも同じだよ。

淳 あと、さっきの恵美の話の後でこんなこと言うのは少し恥ずかしいけど、神様がおれたちをありのまま受け入れ、愛してくれるのと同じように、相手を受け入れるのも大事なんじゃないかな。

幸子 そっか。相手のよいところも悪いところも、まずそのまんまで受け入れなきゃいけないのよね。本当の愛ってそういうことかあ。

恵美 ねえ、でも結婚生活で一番大事なことってなんだと思う？

健二 一番大事なこと？

幸子 ねえ、なんなの？

恵美 それはね、三角関係よ。

健二・幸子 三角関係？

健二 マジかよ。

幸子 浮気しろって言うの？

淳 (笑う) 恵美の言うのは、夫と妻と神様の三角関係さ。やっぱり人間だから、いろいろあると仲が悪くなったりするけど、お互いが神様とつながっていれば、何があっても分かれることなんかないよ。

健二 なるほどね。神様ってまだよく分かんないけど、そんなに人間を愛してんなら、おれたちが幸せになるのをほんとに望んでるのかもしれないな。幸子…ごめん。

幸子 わたしこそ、ごめん。恵美たちを、神様との三角関係のいい見本にして、やり直してみる。よろしくね、恵美。

恵美 さあ大変。責任重大だわ。そうだ、今度の日曜日、みんなで教会へ行ってみな

い？

健二 そうだな。仲直りの印に、教会でデートするか。

幸子 うん。そうしょ。神様の前で結婚式をやり直すつもりで。

恵美 そう言えば、わたしたちの結婚式の時、だれかさんにはマイったわ。大体結婚式に寝坊してくる新郎なんている？

淳 おい、もうその話は勘弁してくれよ！

一同 (笑い)

ナレーション 聖書はこうも言っている。「知識はすたれる。そして才能もなくなってゆく。しかし、愛は決して絶えることがない。」

(完)